

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2013

課題番号：21242009

研究課題名(和文) 多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述

研究課題名(英文) New method of analyzing and describing the history of Indian literature in layered multilingualism.

研究代表者

水野 善文 (MIZUNO, Yoshifumi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80200020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 22,200,000円、(間接経費) 6,660,000円

研究成果の概要(和文)： インドの多言語状況は、時代を通して地域的な多様性だけではなく社会的にも幾つかの層をなしていた。言語の差異を超えて愛好・伝承され続けてきた文学・文芸を対象に、古代から現代まで、多くの言語の各々を扱うことのできる総勢30名以上のインド研究者が共同して研究を進めた。その結果、民衆が自らの日常語による創作から発した抒情詩や説話、職業的吟遊詩人が担った叙事詩、それらをサンスクリット語で昇華させた宮廷詩人、さらには詩の美的表現法が現代の映画作りにも至っている、といったインドの人々の精神史の流れを解明できた。

研究成果の概要(英文)： The multilingualism of India has been not only regional but also layered in even a society from ancient days to today. We, more than thirty scholars who can anatomize a text written in each of the Indian languages, gathered together and studied various kinds of literary works, which were enjoyed and transmitted by Indian people from one language to another. As a result, we could make some historical paths of Indian spiritual culture clear. To be more precise, we traced Indian lyrics and narratives to oral works in a vernacular language by unknown ordinary people and the Indian epics to works written by professional bards. Those works were sometimes cultivated in Sanskrit by court poets and even now the theory of Sanskrit poetics influences the way Indian movies are made today.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：多言語社会 言語横断的 口頭伝承 文学的教養

1. 研究開始当初の背景

(1) インドは時代を通して多言語社会であるにも拘らず、日本語によって紹介されているインド文学史は、古典語であるサンスクリット語、仏典が依拠したパーリ語などの一部のブラークリット語、近現代ではヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、タミル語によって記された文学に限られ、しかも相互の連関も意識されず、個別に語られるだけであった。南アジア地域を研究対象とし、多様な言語をそれぞれ扱うことのできる研究者が近年になってほぼ出揃ったことから、共同研究の機が熟していた。

(2) いわゆる歴史書の類が極度に少ないインドではあるが、文学作品の社会的有用性に着目して歴史資料として分析する手法を採用する研究も登場していた。

(3) この分野の欧米の研究者たちが、我々と同様の問題意識のもと、多言語に跨がる文学史をインドの文化史として描く必要性を重視して、先行して共同研究が進められていた。

2. 研究の目的

(1) 言語横断的に愛好・伝承されて来た文学・文芸をダイナミックな動態として描くことが真のインド文学史であり、これを明確に示すことが、世界のなかで主要国になりつつあるインドの精神性を理解する上でも火急的な要請と認められた。つまり、文学という文化の歴史を通してインド精神史を明らかにすることを究極の目的とした。

(2) その目的達成に向けては、まず、複雑な言語状況のなかで展開した文学・文芸を、言語、ジャンル、創作者、享受者、伝承者といった諸要素を踏まえて、道筋が見えるように整理する方法を構築することが、当座の目標となった。

3. 研究の方法

(1) 同じ問題意識のもと先行して進められていた欧米のインド文学研究者たちによる共同研究の成果、Pollock, Sheldon ed., *Literary Culture in History: Reconstructions from South Asia* (Berkeley; Univ. of California Press, 2003) に所収の論文を批判的に精査し、本研究に益する点は吸い上げることとした。

(2) 言語が異なれば、それぞれの文学を扱うことが可能な研究者も異なり、必然、ジャンルの立て方自体も、言語毎になされることが多かった。あるいは言語の違いとはほぼパラレルに存在した宗教毎(ヒンドゥー、

仏教、イスラーム等々)に文学も区分されたが、純粋に文学の観点から見たジャンル分けではなかった。その反省のもと、個別のテキストを扱うのは、それぞれ専門とするメンバー個人ではあっても、研究会を頻繁に開催して、言語・宗教の枠に嵌めずに、同じテーマや、同じ作風の文学作品の連関性を探り、それらの伝承、享受の様態を浮かび上がらせる方法をとった。

(3) そうした時間的、地理的に縦横に展開する文学・文芸をビジュアルに捉えて理解の補助となるだろうとの予測のもと GIS(地理情報システム)の活用を試みたが、ソフト運用に高度な熟練を要することから、途中で断念せざるを得なかった。

4. 研究成果

(1) アメリカ・コロムビア大学のサンスクリット文学研究者 Pollock が中心となって進められた共同研究の成果である前掲書につき、研究会における論評をへて、本科研メンバーのうち 18 人が分担して、サンスクリット、ペルシア、英語、タミル、カンナダ、テルグ、マラーヤラム、ベンガル、グジャラーティー、シンディー、パーリ、チベット、ウルドゥー、ヒンディーの各言語による文学の項目を、日本南アジア学会の英文雑誌上にて批評紹介した。(“How Should we Describe the South Asian History of Literary Culture? Dialogue with the Essays collected in *Literary Cultures in History: Reconstruction from South Asia*, edited by Sheldon Pollock”, *International Journal of South Asian Studies*, vol. 5 (2013), pp. 43-72.) この作業を通して、言語を超える文学伝承を、より広い視野から、芸術活動のひとつとして捉えることの有用性に気づかされ、本研究を遂行するにあたって、方法論上の示唆を得ることが出来た。

(2) 時間的には上記した書評公表より遡るが、初年度 2009 年 10 月 4 日、北九州市立大学で開催された日本南アジア学会第 22 回全国大会において、「歴史における文学的教養とその場」と題してセッションを設営し、それまでの成果を公表した。(コーディネータ：白田雅之、報告者：北田信、坂田貞二、松村耕光、松木園久子、コメンテータ：太田信宏)(要旨は『南アジア研究』第 22 号 (2010), pp. 121-139 に掲載された。)

文学が人間の様々な営みが交差する場にあったこと、一方で人間が生をことばで表現するうえで必要最小限共有されていたとおもわれる文学的教養という観点から、言語状況の大きな変容が認められる、いわば変革期ごとにパターンを整理した。

最初は、それまで専らサンスクリットによって創作

されていた文学作品が、とりわけ北インド各地においては、近代諸語による創作も見られるようになる9世紀から12世紀である。サンスクリットでありながら、ベンガル地方特有の歌謡形式が採られている『ギータ・ゴーヴィンダ』と、おなじく歌われた地方語による密教修行歌に通底する要素が指摘された。

次に、17世紀後半、イスラーム帝国ムガルが版図を拡げるなかで北インドにバクティ（全幅の帰依）信仰の風潮をもたらしたクリシュナ神とラーマ神をめぐるヒンディー方言による文学諸作品のうちから、『ラーマ・チャリット・マーナス』に注目し、歴史上無数に存在するラーマ物語との特異点を拾い上げて、ムスリムの教養にふれたヒンドゥー的教養が鮮明にされた。

1857年におこったインド大反乱という歴史的な大事件は、その後の文芸創作にも大きな影響を与えた。これをここでは三つ目の変革として設定し、パンジャブ協会を舞台とした詩会、具体的な詩の型式、表現法、内容の分析から、時代的うねりに揺り動かされた様相が鮮明にされた。

最後に、インドも大きくグローバル化の波に呑まれる現代において、ポストコロニアル文学にみられるような、地球規模での場のなかに、インド人作家の活動を通して精神性を見る試みもなされた。

(3) 研究協力者を含めて総勢30名以上からなるメンバーが共同研究をすすめ、全10回の全体研究会を経て、インド精神史を鮮明にできる『インド文学史』の記述法は、以下の6つのトピック（観点）を設定して、共同執筆して行くことが最も有効であるという結論に達した。

1. 歴史的な事件（近・現代史）と文学
2. ラーマ物語
3. 語り：文学・文芸の担い手と場、媒体
4. 映画から語るインド文学
5. 十二ヶ月諷詠（バーラーマーサー）
6. 如何に美しく表現するか

インドの文学・文芸を、とかく嵌めがちな宗教というフィルターを通さずに、純然たる文学的ジャンルをどのように設定できるかという視点から見たとき、古典期においては、抒情詩、叙事詩、戯曲、説話の4つが主なものとして挙げられる。とりわけサンスクリット文学では、語られるストーリーは聞き覚えのある内容がむしろ歓迎され、新奇さは求められず、如何に美しく表現されるかが求められたので、修辭学が発展し、多くの詩論書が残された。中世ヒンディー文学にも詩論家は何人も排出されたから、この詩論もひとつのジャンルとして立てるべきである。古代のタミル文学か

らサンスクリット文学への例もあるように、詩作のノウハウは言語を超えて伝承されたから、文学のダイナミズムを教えてくれる。〈トピック6〉また、インドの詩論の要衝をなすラサ論は、演劇などの文芸鑑賞論で、鑑賞者の心理に如何に訴えるかを緻密なまでに議論しているが、これは現代の映画製作にも生かされており、ここにもインド精神の水脈をみることができる。〈トピック4〉

それぞれのジャンルについて、歴史的な展開について概略をたどってみよう。抒情詩は、その萌芽を仏典に含められるところのパーリ語による出家者たちの懐古を旨とする詩集に認められ、牧歌的詩集も原初の作品はサンスクリットではなく、マハーラーシュトリー語というプラークリットのひとつであった。口語に近い存在のプラークリット諸語は子音が単純化し母音連続が多いことから同音異義語が顕著であり、もって掛詞が容易に作られる。つまり抒情詩にうってつけの言語とされる。

牧歌的な詩のなかには恋愛詩の類いもおおく、例えば『七百詩集』と銘打たれた詩集は、後世、諸言語で編まれ続けることになる。サンスクリット文学の巨匠、カーリダーサに帰せられる抒情詩集に二作品あるが、ひとつは季節を詠む詩集。おそらく巷間の素朴な牧歌から影響されて創作したものと思われるが、こうした六季（インドは四季ではなく六季）の折々の風情、心情を詠む心が今日まで伝わる「十二ヶ月諷詠」に連なっている。〈トピック5〉

二大叙事詩のうち『ラーマーヤナ』は『マハーバーラタ』に比べて洗練され、美文学いわゆるカーヴィヤ文学の嚆矢と評されることもあるが、いずれの叙事詩も、職業的な吟遊詩人たちが雪だるま式に創作し続けて膨れ上がったものであった。とりわけインド人の多くが愛好かつ信仰するラーマ神を主人公とする物語は無数のバージョンがあり、東南アジア諸国にもたらされ翻訳されて多大なる文化的影響を与えてきた。ペルシア語訳されて西アジアにも伝承されているが、東南アジアの場合のように浸透はしていない。こうしたひとつの物語の言語を超える諸バージョンの対比から、それぞれ背景となる時代、地域が見えてくる。〈トピック2〉現代の映画のテーマに採用されることも珍しくなく、伝統的文芸作品の現代的表現として分析対象になりうる。〈トピック4〉

イソップ寓話との関係性も指摘される、動物寓話を多く含む『パンチャタントラ』に代表される説話作品も、作品として最も古い存在はプラークリットのひとつで記されたものとされる。それ自体は現存せず、後代の作品の記録にもとづく情報なのだが、説話の類いは、古くヴェーダ祭において、儀式の一環として語

られていた。その語りは祭官たちとは別の文人たちだったと思われる。ウパニシャッドが編まれ、ブッダが登場した頃に、社会の風潮として認められるほど自由気ままに思索する人々がよく登場する環境があった。そうした環境のもと民話として名も知らぬ文人が語ったお話が、娯楽や教訓の具として、繰り返しそれぞれの日常語で語られ、時折、「これは面白いからサンスクリットという宝箱に入れて大事に保存しよう」と決意した奇妙な文人が編集したものが、説話作品群である。ときには、それが政権をにぎる王の娯楽としても提供され、文人は褒美を貰っていたことだろう。作品化され、文字化されても、母が子供の枕元で語って聴かせるような語りの世界は相変わらずいつの時代も存在した。こうした「語り」をメインにすることで、インド人の精神性をあぶり出すことが出来る。〈トピック3〉

語り、すなわちナラティヴという創作行為は、近現代でいえば、歴史的事件の記述ということになる。例えばインド・パーキスターンの分離独立といった大きな出来事を、多くの文人たちが自分の言葉で表現、記録したが、著者の立っていた場所によって見方が違って当然である。インドの場合、ひとつの事象を巡って、多くの言語で表象されることがしばしばあり得る。そうした関心から、いくつかの全土的な歴史的事件を選んで、諸文学での扱われ方を探ることにも大きな意義を見いだした。〈トピック1〉

以上、本研究の成果として設定できた六つのトピックのそれぞれについて、現在はメンバーによる共同執筆の段階に至っている。述べてきたように、六つのトピックは視点の設定であり、最終的には、それらを統合する形でインド精神史の幾筋かの展開を明白にしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 25件)

- ① 水野 善文、「極楽・龍宮・錬金術—インド諸文献の脈略で—」『南アジア言語文化』査読なし、第8号、pp. 27-71.
- ② 水野 善文、「語り部としてのジャイナ教徒—『獅子座三十二話』を中心に—」『インド学仏教学論集』査読なし、2014、pp. 321-351.
- ③ 坂田 貞二、「16世紀の女流詩人ミーラー・バーイーの目に映ったクリシュナー—20世紀前半の受容に基づく抒情詩の翻訳(抜粋)と解説—」『南アジア言語文化』査読なし、第8号、2014、pp. 72-103.
- ④ Yoshifumi Mizuno, “On and Around the Story of Candrahāsa; *The transmission of a Tale and Bhakti*”, *Bhakti beyond the Forest, Current Rresearch on Early Modern Literatures in North India, 2003-2009*, ed. by Imre Bangha, 査読有 (New Delhi: Manohar), 2013, pp. 97-115.
- ⑤ 藤井 守男、「ホラサーン派神秘主義 Tsawwuf-i Khurasan の言語観—「内的言語 Kalam Nafsi」の観点からする神秘主義言説の基層構造の考察のための試論—」『東洋文化研究所紀要』、査読なし、第163冊、2013、pp. 47- 78.
- ⑥ 坂田 貞二、「16世紀のクリシュナ信仰詩人スールダースによるラーマ物語—翻訳(抜粋)と解説—」『南アジア言語文化』査読なし、第7号、2013、pp. 27-59.
- ⑦ 長崎 広子、「詩人ラスカーンと『愛の庭』—テキストと翻訳—」『南アジア言語文化』査読なし、第7号、2013、pp. 61-79.
- ⑧ Yoshifumi Mizuno, “The Prosody of Keśav Dās”, *Indian and Persian Prosody and Recitation*, ed. by Hiroko Nagasaki, Delhi Saujanya Publications, 査読なし、2012, pp. 131-151.
- ⑨ 石田 英明、「インド文学と戦争——スバーシュチャンドラ・ボースを中心に」『戦争と文学』9、月報 14、集英社、査読なし、2102、pp. 9-12.
- ⑩ Yuko Yokochi, “Triumph of Buddhism or Saivism?: A study in the ninth century Kashmirian poem Kapphinabhyudaya,” *Journal of Indian and Buddhist Studeis*, 60.3 査読あり, 2012, pp. 1153-1160.
- ⑪ 松村 耕光、「『生命の水』におけるアーザードのナーシフ・アーティシュ比較論」『大阪大学世界言語研究センター論集』第7号、査読あり、2012、pp. 3-13.
- ⑫ 坂田 貞二、「北インドの昔話と子ども」石井 正己(編)『児童文学と昔話』三弥井書店、査読あり、2012、pp. 107-119.

- ⑬ 坂田 貞二、「昔話に織りこまれた歌や詩が、語り
を生きいきさせる」『チャンパの花』第8号、査読な
し、2011、pp. 73-78.
- ⑭ Yoshifumi Mizuno, “The Atmosphere of Bhakti in
Literature: A Buddhist Stotra, a Katha and a Folk
Tale”, *The Historical Development of the Bhakti
Movement in India*, ed. by Iwao Shima, Teiji Sakata
and Katsuyuki Ida. New Delhi; Manohar Publishers
& Distributers, 査読なし、2011、pp. 159-182.
- ⑮ Takanobu Takahashi, “Jain Authorship in Tamil
Literature: A Reassessment”, 『インド哲学仏教学
研究』17, 東京大学大学院人文社会系研 究科・文学
部・インド哲学仏教学研究室, 査読なし、2011、
pp. 1-12.
- ⑯ 水野 善文、「文学と宗教」(奈良康明・下田正弘責
任編集)『新アジア仏教史 01 インドI仏教出現の背
景』(校正出版社)第5章、査読なし、2010、
pp. 222-272.

[学会発表] (計 14件)

- ① SAKATA, Teiji, “Hindi *Bārahmāsā*
Tradition: From Jāysī to Present Day Folk
Songs and Popular Publications”, at 11th
International Conference on Early Modern
Literatures in North India, August 3rd-5th, 2012,
Indian Institute of Advanced Study, Shimla
- ② TAKAHASHI, Takanobu, “Jain Authorship in Tamil
literature: Reassessment”, at the 14th World
Sanskrit Conference, September 1-5, 2009,
Kyoto University.
- ③ MIZUNO, Yoshifumi, “Several zigzag paths for
transmitting texts: On the oneiromancy in
India”, at the 14th World Sanskrit Conference,
September 1-5, 2009, Kyoto University.
- ④ SAKATA, Teiji, “Shiva and Parvati Assist
Young Couples in their Marriage as Referred to
in Hindi Devotional Literature and Folk
Songs”, at Tenth International Bhakti
Conference: Early Modern Literatures in North
India held at Sapientia, Hungarian University
of Transylvania, Miercurea Ciuc, Romania

between 22-24 July 2009.

- ⑤ Yoshifumi Mizuno, “On and Around the Story of
Candrasasa : the Transmission of a Tale and
Bhakti”, at Tenth International Bhakti
Conference: Early Modern Literatures in North
India held at Sapientia, Hungarian University
of Transylvania, Miercurea Ciuc, Romania
between 22-24 July 2009.

[図書] (計2件)

- ① Yuko Yokochi, *Skandapurana Volume III, Adhyayas
34. 1-61, 53-69. The Vindhyavasini Cycle. Critical
edition with an Introduction and English Synopsis*,
Groningen Oriental Series, Supplement. Egbert
Forsten, Groningen (2013).
- ② 萩田 博 訳、インティザール・フサイン『イン
ティザール・フサイン 短編集』大同生命国際文化基
金 査読なし、2009年、228p.

[その他]

ホームページ等

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ymizuno/kaken.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野 善文 (MIZUNO, Yoshifumi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：80200020

(2) 研究分担者

藤井 守男 (FUJII, Morio)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：90143619

萩田 博 (HAGITA, Hiroshi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：80143618

太田 信宏 (OHTA, Nobuhiro)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・
准教授
研究者番号：40345319

(3) 連携研究者

坂田 貞二 (SAKATA, Teiji)
拓殖大学・名誉教授
研究者番号：80109751

臼田 雅之 (USUDA, Masayuki)
東海大学・名誉教授
研究者番号：60151867

石田 英明 (ISHIDA, Hideaki)
大東文化大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80255976

宮本 久義 (MIYAMOTO, Hisayoshi)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：30408950

高橋 孝信 (TAKAHASHI, Takanobu)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：10236292

橋本 泰元 (HASHIMOTO, Taigen)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：40256764

高橋 明 (TAKAHASHI, Akira)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：50187994

松村 耕光 (MATSUMURA, Takamitsu)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：60157352

横地 優子 (YOKOCHI, Yuko)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30230650

山根 聡 (YAMANE, Sou)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：80283836

萬宮 健策 (MAMIYA, Kensaku)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：00403204

長崎 広子 (NAGASAKI, Hiroko)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：70362738

井坂 理穂 (ISAKA, Riho)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：70272490